

だから、八一年は記念号の準備で忙しくて、晋樹隆彦さんが編集後記で書かれています。晋樹の編集については皆さんに任せて自分は記念号にかまけたということでしたが、そんな記念号の準備の頃です。

**加古** そのころの東京歌会記を読むと、今いる人はほとんどだれもいないんです。

**黒岩** そうだね。いたのは宇都宮とよさん、斎藤佐知子さん、谷岡亜紀君とか僕とか。人数も、少ないと十七人だったり。多くても二十人をちよつと超えるくらいで、今のように七十首も出詠されるなんて、隔世の感があります。

**高山** 場所は今と同じで、中野サンプラザです。そのころの「心の花」に僕が歌会記を書いているのを今日、黒岩に見せてもらって、びつくりした。

**黒岩** それもとても初々しい感じでね(笑)。  
**奥田** 高山さんもそのころ、早稲田の学生だったんですか。

**高山** だと思えます。黒岩のほうが「心の花」では先輩だけだ。

▽早稲田大学の人気講座

**奥田** 先生はそのころ、まだ跡見のほうがメインだったんですか。

**幸綱** そう。跡見女子大の専任だった。

**黒岩** 早稲田の非常勤講師もされていた。

**高山** 何コマくらい持ってましたんですか。

**幸綱** 早稲田は三コマかな。東京歌会にも来ている森部信次君がこの頃の早稲田の授業に来ていた。当時、俺は「早稲田文学」の編集委員もやっていた。そんな関係で森部君の短編小説が「早稲田文学」に出ているよ。

**黒岩** 二年生のとき、「日本文学概論B」を教えていただきました。「A」は武川忠一さんだった。大学院で卒論の指導をされたりしていましたね。

**幸綱** そう、大学院で修士論文だね。

**高山** 卒論で言うと、黒岩と僕の友人で、今、キューブという結構有名なプロダクションをしている北牧裕幸君が先生のご指導を戴きました。

**幸綱** ちよつと後で俄万智が来た。

**大野** 早稲田の卒論は何枚くらいですか。

**幸綱** 四百字詰原稿用紙で百枚かな。

**黒岩** 僕は百九枚書いた。やつと百枚を超えたんだ(笑)。最初、大宰治で書くつもりで、竹

盛天雄先生が卒論の指導教授で決まっていたんです。あるとき、竹盛先生とお話しして、「君

そういうえば『心の花』で歌をやってる人なんだよね。幸綱君も講師で来られていて、卒論の指導もできるわけだから、一生ものということでしょうと短歌で卒論を書いたほうがいいんじゃないか。啄木とかで書くんなら僕でも見られるが、

せっかくなら幸綱さんが先生にいらっしゃるから、指導教授の変更手続きをしようよ」と言われて、この間、亡くなったばかりですが秋永一枝先生という国語学の権威だった方が日本文学の専攻主任だったので、秋永先生のところに行つて、「すみません。卒論の担当の先生を代わっていただくんですが」みたいなことで代わって

いただいて、幸綱先生に見ていただいたというのが経緯としてあります。

**幸綱** 国語学の秋永さんは、大口玲子の卒論指導の先生だったんだと思うよ。もう少し時代は後だけだ。

**高山** 僕は東洋哲学科だったけど、先生の講座をとりました。先生の講座は人気があつて、大教室でした。

**黒岩** 俵さんが何かのエッセイに書いてましたが、僕の二年後に俵さんが一文(第一文